

日本科学未来館とは

日本科学未来館は、21世紀の新しい知を分かち合うために、すべての人にひらかれたサイエンスミュージアムです。

活動の中心にあるのは先端の科学技術。これは私たちの現在を変革し、次の時代を切りひらく大きな可能性をもつ「新しい知」です。日本科学未来館では、さまざまな分野に波及するこの先端科学技術の営みを人間の知的活動という視点から捉え、私たちが豊かにする文化の一つとして社会全体で共有することを目指しています。

名称	<small>にっぽん かがく みらいかん</small> 日本科学未来館（略称：未来館） National Museum of Emerging Science and Innovation
愛称	Miraikan
館長	毛利 衛
運営	独立行政法人科学技術振興機構（JST）
開館	2001年7月
所在地	〒135-0064 東京都江東区青海2丁目3番6号
URL	http://www.miraikan.jst.go.jp/

シンボルマーク



デザイン：廣村正彰

「Miraikan」という愛称についている青いシンボルマークは、正円と、正円を駆けめぐる円弧とで構成されています。「地球と衛星軌道」、「細胞分裂」、「地球上のさまざまなネットワーク（人と人、情報）」、「電子の動き」などをイメージさせるもので、展示の4テーマ「地球環境とフロンティア」「生命の科学と人間」「技術革新と未来」「情報科学技術と社会」を象徴しています。

スローガン

科学が
わかる 世界が
かわる

日本科学未来館の姿勢を表明しているのが、「科学がわかる 世界がかわる」というスローガンです。

「科学がわかる」とは、必ずしも科学を学習し、理解することを意味しません。先端の科学技術という「新しい知」に触れることで、新しいものの見方と出会う。それも「科学がわかる」ことのひとつです。「世界がかわる」とは、それによって周囲の世界が違って見えてくること、そしてそのことが、世界をよりよい方向に進めていく力となることを指しています。

「新しい知」によって「かしこく生きる」社会をつくらうとする未来館の姿勢が、このスローガンにこめられています。

沿革

日本科学未来館は、科学技術創造立国のための「科学技術基本計画」に基づき、科学技術への理解を深めるための拠点として国際研究交流大学村内に建設され、2001年に開館した国立の科学館です。

1995年 11月	科学技術基本法が成立 科学技術の振興を進めることによって科学技術創造立国を目指すことを目的とした科学技術基本法が成立
1996年 7月	科学技術基本計画が策定 科学技術基本法の成立を受けて総合的・計画的な施策を推進するための科学技術基本計画が制定
1998年 12月	「国際研究交流大学村」の建設が決定 文部省、通商産業省、科学技術庁の三省庁 ^(*1) が合同で、臨海副都心地区に「国際研究交流大学村」を建設することが決定 科学技術庁傘下の科学技術振興事業団 ^(*2) が、この大学村内に最先端の科学技術の展示、展示手法の開発、研究者の交流などを通じて科学技術の情報を発信していく施設を整備することになる <small>*1 2001年1月、省庁再編成により文部科学省、経済産業省の二省となる。 *2 2003年10月より独立行政法人科学技術振興機構(JST)となる。</small>
1999年 12月	着工開始
2000年 3月	総合監修委員会を設置 日本科学未来館のあり方などについての審議を行うため、JSTに総合監修委員会を設置し、展示計画、活動方針などについて具体的な検討を2000年12月まで重ね、それをもとに館の整備が進められた
9月	施設の名称を「日本科学未来館」に決定
10月	毛利衛が館長に就任
2001年 3月	建物が完成
	シンボルマーク決定
7月9日	日本科学未来館が開館
2007年 4月	民間委託の拡大による運営体制に移行
2010年 10月	日本科学未来館の運営体制の見直し 2009年11月に開催された行政刷新会議「事業仕分け」の結果を受け、予算を縮減しつつ、JSTによる運営業務直執行体制となる新生未来館が発足
	国際総合監修委員会、「Miraikanフォーラム2010」の開催 未来館の今後の活動の方向性について国際的な視座から審議するため、国際総合監修委員会を設置。地球人類の持続的発展に向けた科学館の役割や、未来館が世界トップレベルのサイエンスセンターとして果たす役割・方向性について「Miraikan Message 2010」にまとめ、「Miraikanフォーラム 2010」において発信

日本科学未来館のとりくみ

先端科学技術と人とをつなぐための拠点として、主に3つのことにとりくんでいます。

1. 科学を伝える——先端科学技術の情報発信と伝達手法の開発

常設展示、企画展、映像、イベントなど多彩な方法と切り口で、「新しい知」としての先端科学技術を館の内外で伝えると同時に、伝え方そのものについても独自の手法開発を行っています。

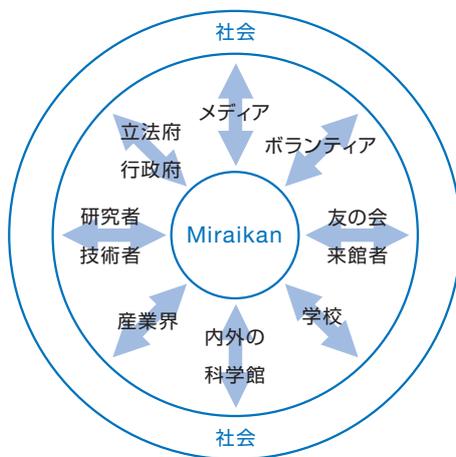
2. 人材を育てる——科学コミュニケーターの育成

未来館で行っている「科学を伝える」活動の実践を通して、科学者・技術者と一般市民との橋渡しをする科学コミュニケーターを館の内外に育成し、人材の輩出を図ります。

3. つながりをつくる——8つのネットワークの形成

研究者・技術者、メディア、ボランティア、友の会・来館者、立法府・行政府、学校、内外の科学館、産業界の8つを、未来館の活動と社会をつなぐインターフェースと捉え、ネットワークの構築に努めています。

8つのネットワーク



日本科学未来館が目指すもの

■ 設立の理念

科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場。

■ 未来館が目指すもの

科学と向き合う心を潜在的に備えている人すべてに対し、先端に行く「新しい知」を分かち合うことで、一人ひとりが未来を見つめ、かしこく生きていける社会を実現する。

■ 未来館スタッフの行動指針

1. 見てもらうのは物より人です。
2. 発見してもらうのは出会いです。
3. 分かち合いたいのは心からの共鳴です。
4. そのために市民と一緒に運動体を作ります。
5. 開かれた研究の拠点となり、研究者を支援します。
6. ボランティアの力を結集させ、人と一緒に成長します。
7. 狭義の科学技術というカテゴリーに留まりません。
芸術もスポーツも政治も経済も私たちの運動体を形成します。
8. そのために柔軟で開かれた「場」を作ります。
9. コミュニケーションとネットワークづくりも私たちの仕事です。
10. 来てもらう場がありますが、出かけていく場も求めます。

日本科学未来館における科学コミュニケーション活動とは

■対話の場の創出

持続的に発展する豊かな社会の実現のため、さまざまな人が参加する対話の場を創出します。それぞれの価値観を認め合いながら、未来の方向性について合意形成を目指した議論を行います。

■新しい知の提供

未来社会を議論する上で必要な、文化としての科学技術によって得られた新しい知を提供します。新しい知とは、宇宙における私たち人間の立ち位置の理解、およびより良い社会システム構築のために人間活動を支援する方法です。

この新しい知を、以下の3つの観点に着目して伝えます。

1. 社会の抱える問題の科学的な捉え方を示します。それにより、事実に基づく論理的な議論を通じて、問題を解決に導くことができます。
2. 新しい科学技術が社会をどのように変化させるのかを示します。それにより選択し得る未来社会像を共有します。
3. 先端研究によって拓かれる、新しい世界観を伝えます。それにより人々の抱く価値観は更新され、未来社会を方向付けます。

■社会との共鳴

人々が新しい未来社会を目指すには議論を通じての理性的な納得のほかに、個々人が抱く心情的な納得も必要です。科学技術だけでは成し得ない、人と人との関係も大切にし、社会との信頼関係を築きます。

このような科学コミュニケーション活動において、次の3つに留意します。

1. 科学コミュニケーション活動に参加することが、参加者にとって喜びをもたらすものにします。それにより、参加者が単なる受け手にとどまらず、積極的な関与者となります。
2. 活動する科学コミュニケーターが、やりがいのある活動として実践します。それにより、参加者から共感を引き出すことができます。
3. 科学コミュニケーション活動によって、社会全体に利益をもたらします。それにより、科学コミュニケーションが社会を豊かにする価値ある活動として、人々に理解されます。

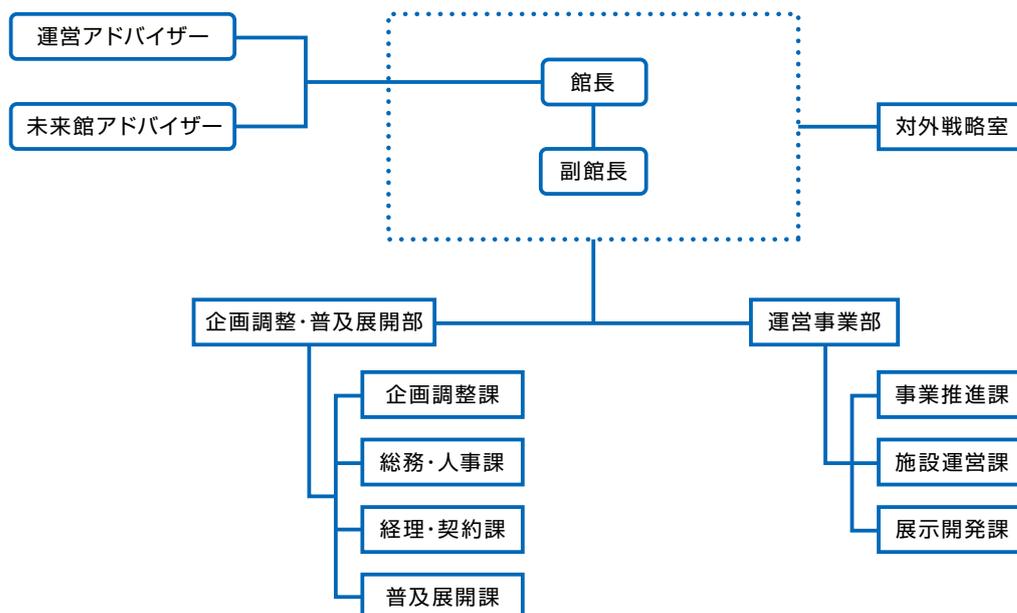
組織

■日本科学未来館 役員

館長 毛利 衛

副館長 小中 元秀

■組織体制



2011年4月1日現在

総合監修委員会

総合監修委員会は、日本科学未来館のあり方などについての審議を行うため、2000年3月、科学技術振興事業団^(*)によって設置された委員会で、未来館における全体の展示計画に関すること、整備および運営の基本に関することなどについて、審議・監修を行っています。

*1 2003年10月より独立行政法人科学技術振興機構(JST)となる。

委員長

安西祐一郎／慶應義塾 学事顧問・慶應義塾大学理工学部 教授

委員 (順不同、敬称略)

青野由利／毎日新聞 論説委員

金澤一郎／日本学術会議 会長

木下俊男／日本公認会計士協会 専務理事

近藤信司／独立行政法人国立科学博物館 館長

榊 裕之／豊田工業大学 学長

高柳雄一／多摩六都科学館 館長

豊田 皓／株式会社フジテレビジョン 代表取締役社長

中村桂子／JT生命誌研究館 館長

早川 茂／トヨタ自動車株式会社 常務役員

山極 隆／玉川大学学術研究所 特任教授

国際総合監修委員会 (International Advisory Board)

国際総合監修委員会 (IAB) は、日本科学未来館の総合的な評価および今後の活動の方向性について国際的な視野から評価し、的確な事業展開を図るため、独立行政法人科学技術振興機構(JST)によって2010年6月に設置された委員会です。本委員会は、世界各国の科学技術分野・科学館分野の第一人者によって構成されており、地球人類の持続的発展を目指す科学技術のあり方と科学館の役割を議論し、未来館が世界トップレベルのサイエンスミュージアムとして果たす役割・方向性についてアドバイスを得る場です。

委員 (順不同、敬称略)

ブルース・M・アルバーツ／アメリカ Science (AAAS)誌 編集長

ゴリー・デラコート／イギリス アット・プリストル科学館 館長

クローディ・エニユレ／フランス Universcience: 科学産業都市 (科学都市博物館) および発見の殿堂 (科学博物館) 館長

スバント・リンドキスト／スウェーデン 王立科学アカデミー 会長

ラジェンドラ・K・パチャウリ／インド 気候変動に関する政府間パネル(IPCC) 議長

李祥羲／韓国 国立果川科学館 館長

徐延豪／中国 国立中国科学技術館 館長

安西祐一郎／日本 慶應義塾 学事顧問・慶應義塾大学理工学部 教授

金澤一郎／日本 日本学術会議 会長

豊田 皓／日本 株式会社フジテレビジョン 代表取締役社長

中村桂子／日本 JT生命誌研究館 館長

吉川弘之／日本 独立行政法人科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター長

日本科学未来館 名誉館員

名誉館員制度は、開館3周年を記念して2004年7月に創設されました。この制度は、科学技術に特に顕著な貢献によりノーベル賞、フィールズ賞など国際的に認められる賞を受賞され、未来館への理解と協力をいただいた研究者を顕彰し、未来館として敬意の念を表すものです。

名誉館員 (順不同、敬称略)

小柴昌俊／東京大学名誉教授 (2002年ノーベル物理学賞受賞)

白川英樹／筑波大学名誉教授 (2000年ノーベル化学賞受賞)

田中耕一／島津製作所田中耕一記念質量分析研究所長 (2002年ノーベル化学賞受賞)

野依良治／理化学研究所理事長 (2001年ノーベル化学賞受賞)

ハロルド・W・クロトー／米国フロリダ州立大学教授 (1996年ノーベル化学賞受賞)

リチャード・ティモシー・ハント／英国 キャンサーリサーチUK (Cancer Research UK) (2001年ノーベル医学生理学賞受賞)

アレクセイ・A・アブリコソフ／米国アルゴンヌ国立研究所 (2003年ノーベル物理学賞受賞)

江崎玲於奈／茨城県科学技術振興財団理事長 (1973年ノーベル物理学賞受賞)

ラジェンドラ・K・パチャウリ／気候変動に関する政府間パネル(IPCC) 議長 (2007年ノーベル平和賞受賞)

ペーター・A・グリュンベルク／ユーリッヒ研究所教授 (2007年ノーベル物理学賞受賞)

ルドルフ・A・マーカス／カリフォルニア工科大学教授 (1992年ノーベル化学賞受賞)

小林 誠／高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授、日本学術振興会理事 (2008年ノーベル物理学賞受賞)

益川敏英／京都産業大学教授 (2008年ノーベル物理学賞受賞)

2011年3月現在

国際総合監修委員会「Miraikanメッセージ」

日本科学未来館は、2011年度に開館10周年を迎えるにあたり、世界各国の科学技術分野・科学館分野の第一人者を委員とした国際総合監修委員会(IAB)を2010年10月に開催し、国際的サイエンスコミュニケーション推進に関わる「Miraikanメッセージ2010」を世界にむけて発信しました。

「Miraikanメッセージ2010」は、国際総合監修委員会での議論をもとに、人類が直面する地球規模課題の解決のために、科学館が果たす役割についての提案であり、日本がリーダーとして世界に貢献するための重要な提言です。

■Miraikanメッセージ2010

1. 地球規模の課題には人類のあらゆる知恵を総動員する対策が必要です

地球温暖化や生物多様性といった地球規模の課題は、人類存続に脅威を与える問題であり、同時に、私たち一人ひとりの毎日の生活に衝撃を与える個人の存続の問題でもあります。賢者は「あなたが見たいと思う世界の変化にあなた自身になりなさい」と言っています。それゆえ、私たち一人ひとりには、この地球規模の課題の解決のために取り組む役割があります。

人類はこれまで社会的集団として持続的に生き延び、より豊かな暮らしを得るために育み伝承してきた知恵を持っています。これらの地球規模の課題を改善し、対策を実行するためには、人間のあらゆる知恵を総動員することが必要です。

2. 文化としての科学技術

文化とは、人類がこれまで育み伝承してきた知恵の総体を意味します。すなわち、政治、経済、宗教、倫理、芸術・スポーツ、そして科学技術などすべての人間活動が含まれます。

私たちは、科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について、考え、語り合う場をつくります。

3. 日本科学未来館はグローバルな活動を発展させます

地球規模の課題解決には国際協力が必要です。しかし、各国が自国の利益に重きを置けば、解決策を見つけることは困難となるでしょう。重要なことは、すべてのために持続可能な地球環境を確かなものにするグローバルな視点を持つことです。そのためには、世界が受け入れられる科学的なものの方が必要となります。それこそが、人類の文化の一翼を担う科学技術であり、人類共通の価値を共有して公益に役立ちます。

日本科学未来館は、科学技術を身近な文化にする活動に取り組んできました。そして、その活動を地域、全国、そして世界に広げようとしています。私たち国際総合監修委員会(IAB)は、われわれの惑星・地球を守るために、世界的な協力と協調を通して、この活動を推進することを支持します。

MOU (Memorandum of Understanding)

■ MOU

MOUは、学術研究相互協力および教育研究協力に関する協定(友好協力の覚書)です。

日本科学未来館では、国内外の科学館や大学・研究機関などとMOUを交わしており、情報交換や人材交流、イベントの共同開催などを行っています。

■ MOU締結先 (五十音順)

国立 果川科学館 (韓国)

広東科学センター (中国)

Questacon -The National Science and Technology Centre (オーストラリア)

株式会社 国際電気通信基礎技術研究所

Science Museum of Minnesota (アメリカ)

独立行政法人 産業技術総合研究所臨海副都心センター

学校法人 千葉工業大学

国立 中央科学館 (韓国)

公立 はこだて未来大学

2011年4月1日現在

常設展示監修者

■ 展示監修者一覧（順不同、敬称略）

● 地球環境とフロンティア

的川 泰宣	独立行政法人宇宙航空研究開発機構 宇宙教育センター 技術参与
松井 孝典	千葉工業大学 惑星探査研究センター 所長
石田 瑞穂	独立行政法人海洋研究開発機構 図書審議役・特任上席研究員
梶田 隆章	東京大学 宇宙線研究所 所長
唐牛 宏	東京大学 数物連携宇宙研究機構 特任教授／国立天文台 名誉教授
平 朝彦	独立行政法人海洋研究開発機構 理事
船岡 正光	三重大学 生物資源学研究所 教授
山内 正則	大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 副所長
海部 宜男	放送大学 教授／国立天文台 名誉教授

● 生命の科学と人間

金澤 一郎	日本学術会議 会長
高坂 新一	国立精神・神経医療研究センター 理事(研究担当)
勝木 元也	独立行政法人日本学術振興会 学術システム研究センター 副所長
小原 雄治	国立遺伝学研究所 生物遺伝資源情報研究室 教授
石塚 典生	財団法人東京都医学研究機構・東京都神経科学総合研究所 参事研究員
大久保公策	国立遺伝学研究所 遺伝子発現解析研究室 教授
服部 正平	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 生物情報科学科 教授
美宅 成樹	名古屋大学大学院 工学研究科 計算理工学専攻 教授

● 技術革新と未来

榊 裕之	豊田工業大学 学長
北野 宏明	株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所 取締役所長
並木 明夫	千葉大学大学院 工学研究科 人工システム科学専攻 准教授
古田 貴之	千葉工業大学 未来ロボット技術研究センター 所長
渡辺 富夫	岡山県立大学 情報工学部 情報システム工学科 教授／情報工学 部長・研究科長
浅田 稔	大阪大学大学院 工学研究科 知能・機能創成工学専攻 教授
広瀬 茂男	東京工業大学大学院 理工学研究科 機械宇宙システム専攻 教授
高西 淳夫	早稲田大学理工学術院 創造理工学部 総合機械工学科 教授
北森 武彦	東京大学大学院 工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻 教授／工学系研究科長
平川 一彦	東京大学 生産技術研究所 教授
伊藤 公平	慶應義塾大学 理工学部 物理情報工学科 教授
木島 正志	筑波大学大学院 数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 准教授
石谷 治	東京工業大学大学院 理工学研究科 化学専攻 教授
染谷 隆夫	東京大学大学院 工学系研究科 電気系工学専攻 教授

● 情報科学技術と社会

村井 純	慶應義塾大学 環境情報学部長／教授
岩田 洋夫	筑波大学大学院 システム情報工学研究科 教授

● 実験工房

白川 英樹	筑波大学 名誉教授
里川 重夫	成蹊大学 理工学部 教授
北澤 宏一	独立行政法人科学技術振興機構 理事長
野村 泰朗	埼玉大学 教育学部 准教授
広瀬 洋一	東海大学 工学部 教授

2011年3月末日現在

研究エリア

展示スペースの奥には、最先端の研究を行うプロジェクトチームの研究室があります。科学館という一般の人に開かれた場に、このような研究室が常駐しているのは極めて珍しいことです。また、定期的にボランティアによる来館者のための見学ツアーを開催しています。

■現在行われている主なプロジェクト

●空中3Dディスプレイプロジェクト

本当の3D空間で3Dイメージを見ることが可能な、「実像の3Dディスプレイ」を開発しています。

●事故予防のための日常行動センシングおよび計算論の基盤技術(子どもの事故予防工学)プロジェクト

日常行動についてセンサーを用いてデータを収集・分析し、子どもに起きやすい事故を減らすための研究をしています。

●ATP合成制御プロジェクト

細胞の中でエネルギー源となるATPをつくる酵素の回転運動の制御について研究しています。

●ロボットOSプロジェクト

100万分の1秒で制御ができる、故障がおきても瞬時に検知できる、ロボット用OSを研究開発しています。

■Miraikan研究棟ツアー

普段は入ることのできない研究エリアへお招きして、先端研究プロジェクトをわかりやすく解説する「研究棟ツアー」をボランティアが行っています。

<ツアーの参加方法>

参加方法:開始30分前より、1階オリエンテーションルームにて受付。

定員:先着15名(ATPツアーのみ定員は10名)

※ツアーのスケジュールについては、HPをご覧ください。

(<http://www.miraikan.jst.go.jp/event/other/>)

※実施スケジュールは変更する場合がございます。参加ご希望の際は当日ご確認ください。



研究エリア



研究棟ツアー

2011年3月現在

展示物や大型映像の貸出

■巡回展・展示物の貸出

これまでに開催してきたオリジナル企画展を、国内外の科学館などさまざまな施設に貸し出しています。

●「ドラえもん科学未来展」

「タケコプター」「透明マント」などひみつ道具が繰り広げる夢の世界と、現在の科学技術とを重ね合わせて分かりやすく紹介します。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場条件：応相談



●「'おいしく、食べる'の科学展」

現代の食をとりまくさまざまな疑問や問題に対し、先端科学技術の視点で迫ります。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場条件：天井高さ：3.0m以上
会場面積：600㎡(縮小版：50㎡、100㎡、300㎡) ※応相談



●「お化け屋敷で科学する！ 2

～恐怖の実験～
人間が恐怖として感じるさまざまな怪奇現象を、物理学、化学、生物学などの先端科学で解き明かします。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場条件：応相談



●「69億人のサバイバル」展

「現代人のサバイバル」をテーマに、「人類のサバイバル・ツール」としての科学の最前線を探究します。

対象年齢：小学校中・高学年～大人
会場条件：天井高さ 3.2m以上
会場面積：200㎡～400㎡程度 ※応相談



●「きみの未来・未来のきみーかこさとしと探しにいこう、絵本の中へ」

日本を代表する絵本作家、かこさとし氏から未来をになう子どもと親へ、バトンを引き継ぎ、ともに語り合うための展示です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場条件：天井高さ：2.3m以上
会場面積：150㎡～300㎡ ※応相談



●「時間旅行」展—TIME! TIME! TIME!

科学的視点による多様な「時間」の世界を「旅」していくというコンセプトに基づいた展示です。

対象年齢：小学校低学年～大人
会場条件：天井高さ 4.5m以上
会場面積：200㎡(縮小版)、600㎡ ※応相談



■大型映像の制作・配給

日本科学未来館では研究機関・映像制作会社など外部機関の協力を得て、オリジナルの大型映像作品を制作しており、国内外の多くの科学館等にて上映されています。

●「FURUSATO

—宇宙からみた世界遺産—
(2010年)

配給：株式会社 TBSビジョン

©日本科学未来館/TBSビジョン



●「宇宙エレベータ

～科学者の夢みる未来～
(2007年)

配給：株式会社ウォーク

©2007日本科学未来館/ウォーク/
エッグボックス/シブヤテレビジョン/
©2007StudioKajino



●「Young Alive!

～iPS細胞がひらく未来～
(2010年)

配給：株式会社電通テック



●「アースストーリー

～恐竜の進化とヒトの未来～
(2005年)

配給：株式会社D&Dピクチャーズ

©日本科学未来館/ネットアドバンス/
IMAGICA FORCE/D&Dピクチャーズ



詳しくは、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 巡回展担当 03-3570-9151(代表)

パートナーシップ制度

一般社会と関わりの深い産業界との協力関係を構築することで、科学技術と社会とのコミュニケーションの活性化を図ることを目的としたパートナーシップ制度を設立しました。この制度を通し、急速に発展した科学技術の現状に向き合いながら、社会が必要とする情報発信や、地域社会への積極的な普及活動を推進していきます。

パートナーシップ制度は、3つの大きな支援を軸としています。

オフィシャル パートナー (プラチナ/ゴールド/シルバー)	館内の展示制作からアウトリーチ活動にいたるまで、科学技術と社会とのコミュニケーションの活性化に資する取り組みを、当館とともに総合的に行う支援機関
パートナー	日本科学未来館の理念に賛同し、科学技術の振興と理解増進を支援する機関
オフィシャル サプライヤー	日本科学未来館の理念に賛同し、主に展示内容および展示品の支援を行う機関

■ オフィシャル パートナー

〈プラチナ〉

RICOH

株式会社リコー

〈シルバー〉

AsahiKASEI

旭化成株式会社

docomo

株式会社NTTドコモ

九州電力

九州電力株式会社

TOPTOUR

トップツアー株式会社

リソー教育グループ

株式会社リソー教育

中外製薬

ロシュグループ

中外製薬株式会社

■ オフィシャル サプライヤー

レゴ ジャパン株式会社

株式会社 岡村製作所

学校法人 千葉工業大学

有限会社 ラド

株式会社 日立ハイテクノロジーズ

シグマアルドリッチジャパン株式会社

2011年4月1日現在

特典や協賛金などパートナーシップ制度につきましては、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 パートナーシップ担当 Tel: 03-3570-9162

友の会

年会費によってさまざまな特典が得られる会員制度。年間フリーパス、会報(年4回発行)送付、館内ショップでの割引などの特典があります。

■友の会 年会費

- ・個人会員 1,200円
- ・家族会員 2,400円(同居の家族全員で)

■友の会 特典

- ・日本科学未来館の常設展示に無料で入館できます。(年間フリーパス)
- ・「Me+Sci(ミーサイニュース)会員限定版」を年4回お届けします。
- ・会員限定のイベントへのお申し込みができます。
- ・館内のショップが割引になります。
- ・「船の科学館」・「リスーピア」への割引入場ができます。

友の会「プラス会員」

友の会「プラス会員」は、より積極的に未来館を応援し、未来館の活動を一緒につくっていく会員制度です。友の会の特典にサービスがプラスされ、さまざまな活動に優先的に参加でき、先端の科学技術をさらに詳しく知ることができます。

■「プラス会員」年会費

- ・個人会員プラス:5,000円
- ・家族会員プラス:10,000円(同居のご家族4名様まで、5名様以上はおひとりにつき2,000円追加)
※友の会「プラス会員」は年1回、人数限定で募集しています。

■「プラス会員」特典

- 友の会の特典に加え、下記の特典があります。
- ・有効期間中に対象となる企画展の招待券(おひとり1枚ずつ)を進呈します。
 - ・会員限定イベントへ優先的に参加できます。
 - ・ドームシアターガイアの事前予約ができます。

会員数 (2011年3月末日現在)

個人会員	2,986人(うち「プラス会員 個人 101人)
家族会員	32,123人(7,997世帯)(うち「プラス会員 家族 1,097人)
合計	35,109人(うち「プラス会員 1,198人)

詳しくは、下記までお問い合わせください。
日本科学未来館 友の会担当 Tel: 03-3570-9151(代表)

ボランティア

展示解説から実験工房での実験補助などの運営支援まで、多様なかたちでボランティアが活躍しています。ボランティアは、自分自身をより高めたいという人たちの集まりです。その活動は、日本科学未来館の主旨をもっとも反映しており、新しい社会貢献の姿でもあります。

活動実績 (2010年度総計)

活動実績のべ人数	9,392人
活動時間	61,784時間

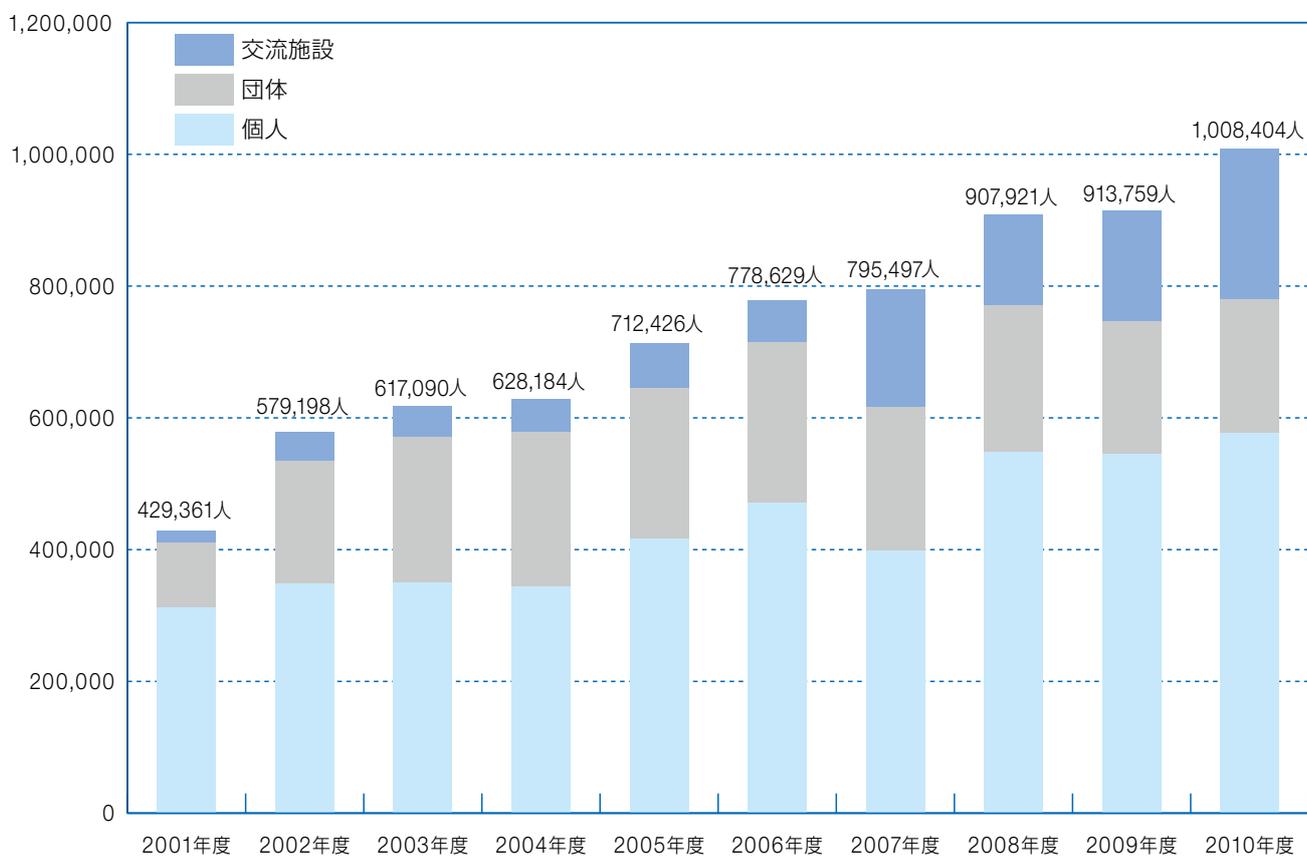
ボランティアには3つのカテゴリー(活動方法)があり、多様な活動を展開しています。

カテゴリー	スタッフボランティア 職員の実務をサポート (募集若干名)	レギュラーボランティア 館内での基本的な ボランティア活動	サテライトボランティア 館外での活動や、 短期間・短時間の活動
活動内容	<ul style="list-style-type: none">・ボランティア事務担当・友の会担当・展示解説担当	<ul style="list-style-type: none">・展示フロアでの展示解説・サービスカウンターでの来館者対応	<ul style="list-style-type: none">・左記レギュラーと同様の活動など
条件	<ul style="list-style-type: none">・20歳以上・週に1回以上の活動・活動時間 9:30~17:30・運営に関心のある方	<ul style="list-style-type: none">・高校生以上・年間12回以上の活動・活動時間 9:45~17:00	<ul style="list-style-type: none">・高校生以上・活動回数と時間は応相談

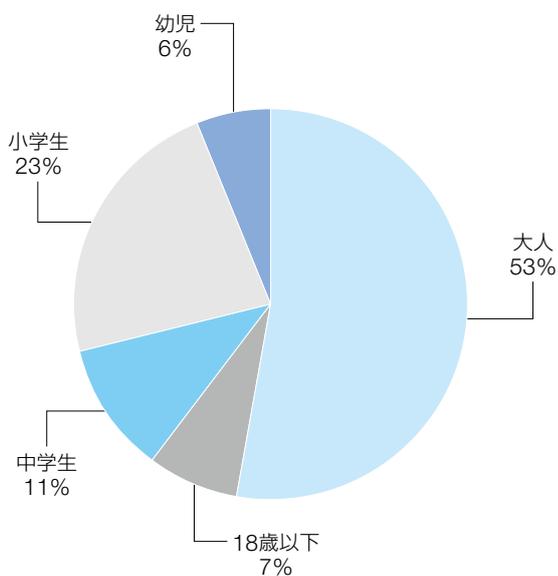
参加申込みなど詳しくは、HPをご覧ください。
<http://www.miraikan.jst.go.jp/linkage/volunteer/>

来館者データ

来館者数推移



年代別内訳 (2010年度)



団体来館者における地域別内訳 (2010年度)

